

Title	Digging up the Past (The Romance of Archaeology with 32 pages of illustrations) by Sir Leonard Woolley., London, 1937
Sub Title	
Author	平山, 榮一 (Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.143- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る人の出る事を望んでやまぬ事を申し添へて此書評を終る事とする。(松尾善郎)

Digging up the Past (The Romance
of Archaeology with 32 pages of
illustrations) by Sir Leonard
Woolley. London, 1937.

普及版 Pelican Books の中に出された本書は、ウルの發掘によつて有名な Woolley 氏がラヂオ放送の講演を骨子として清新な寫眞を加へ、發掘考古學 (Field Archaeology) の入門として提供されたる、百餘頁の小冊子であるが、頗る内容豊富にして、學的態度を以て一貫された好著である。いま簡単にその内容を紹介するならば、

第一章は緒論として發掘考古學の目的を論じ、單なる古物の發見にあらずして發掘物に近代性を見出すことが我々の興味を喚起する所以なることを説き、發掘物の史的關聯を明らかにするをその目的となすと述べ、次いで『何故發掘を行ふか』、即ち目的物を發掘せねばならぬ理由について、遺跡の地中に埋没せる理由、その地點を如何にして知るかにつき、著者の經驗による實例を擧げて説明する。

第二章『發掘の開始』に於ては、遠征隊の準備につき必要なるスタッフの問題、確實なる記録の必要、大規模の發掘作業に於け

る人員の配分と統制、發掘品に對する盜難の豫防、隊員への獎勵、學者自身の作業などの實際問題を興味深く説明し、さて如何なる地點より實際の發掘を行ふべきかにつき、トレンチングの開始、年代順に作業を集中すべきこと、城壁をたどる方法、土器の形式を以て年代測定の基準となす場合多きことなどを述べる。

第三章『都市の遺跡に於ける作業』として、先づ着手する建築物の性質と年代の決定をなすべきこと、その具體的方法につきて説き、次いで建築物のプランの確定を要すること、その發見の實際上の苦心につきテル・エル・アマルナの神殿とウルに於ける私人の住居の發掘の實例を語り、それより得たる事實が當時の生活の上に多大の光明を投じ、また更に重大な史實を知らしめることを述べ、發掘の結果と記録による史實との照應、記録の缺けたる場合に於ける比較的方法による關聯の推定と發見を論じ、エジプト出土の印章がメソポタミヤ起原なることを推定するに至つた興味ある實例を擧げ、最後に考古學によつて史的關聯は明らかにし得るとも記録無き時代の年代確定は不可能なることなどを論ずる。

第四章『墳墓の發掘』に於ては、我々が實際に最も多くの遺物を得るのは墳墓よりであること、副葬品の性質と意義を述べ、盜掘が廣範圍に及べる事實、發掘の事實上の困難、發掘物をその原位置を動かさずして觀察すべきこと、精密なる作業の方法、忍耐深き勞力を以てする發掘物の復原の實例として、蠟、石膏の使用による家具の復原、骨格の保存、土版の復原などを詳細に説明する。

第五章『考古學的資料の利用』に於ては、現地より得たる資料

の綜合、比較、分類、ノートの整理、年代的排列の方法などを説明する。

要するにこの一書は斯學の入門として有益なるのみならず、單なる讀物としても平易にして興趣に富んでゐる。豊富なる舉例は、著者の實際に従事した近東、エジプト、イギリスにわたつて述べられ、すべて古代史の領域に關聯する。本書に於ける如き實績は我が國の發掘作業とはおのづから方法も異なるべく、かくの如き大發掘に關して我々はたゞ現地操作の報告に接するのみであるが、ともかく學問的方法について非常な興味を覺えしめる點から一讀を推賞したい。(平山榮一)

南洋叢書 (東亞經濟調查局刊)

財團法人東亞經濟調查局の手に依つて南洋叢書の刊行が計畫され、既に昭和十二年三月にその第一卷蘭領東印度篇が上梓され、同年十二月には第二卷佛領印度支那篇、續いて十三年三月には第三卷英領マレー篇が刊行され、残るはシヤム篇とフィリッピン篇のみとなり、全五卷の完成も近づいて來た。本叢書刊行の目的は南洋全般の經濟事情を詳細に知らしめんとするにある。各篇に就て其の敘述の形式をみるに、先づ各地方の地理に筆を起し、その歴史と政治を説き、然るのち財政、産業、交通・通信、外國貿易、貨幣・金融などに就て詳細に記述してゐる。この點は各篇とも一致してゐるが、蘭領東印度篇と佛領印度支那篇に於ては、以上の外に「社會」の一章を設けて言語、教育、宗教、衛生、風習、藝

術、娛樂などに就て述べて居り、また特に前者に於てはその附録に「蘭領東印度の特殊法規」として、土地、航海、鑛業、輸出入、事業、外國人勤勞、漁業などに關する法規を載録してゐる。三篇を通じての總頁數は實に一千二百を超へ、従つて内容は各項とも極めて詳細であり、殊に各篇とも卷末に事項索引と統計索引を附し、別に各地方の彩色地圖を添附して讀者の便を計り、最も完備せる編纂物となつてゐる。只だ本叢書編纂に使用せる文獻に就ては、統計書を明記せるのみで、その他一般の文獻を掲載しないのは(部分的にはこれを示した個所もあるが)、斯の如き學的良好を以て爲された編纂物としては如何にも惜しい感がある。殊に最も問題の多い歴史の部分に於て、それがたとひ本叢書の主要部ではないにしても、參考文獻は一應明記して欲しかつた。が、かくの如き注文はなされ得るとしても、數多い南洋關係の編著作物の中で、本叢書の如く整備せるものは極めて稀であり、特に我が國が一大飛躍の途上にある現下の時局からみて最も時宜を得た編纂物として推獎することが出来る。(蘭領東印度篇定價二圓八十錢、佛領印度支那篇英領マレー篇定價各二圓三十錢)(有賀春雄)

寄贈交換圖書雜誌目錄

支那と佛蘭西美術工藝 小林太市郎著 東方文化學院京都研究所
 宋本禮記疏校記 常盤井堅十著 東方文化學院京都研究所
 繪具染料商工史 大阪繪具染料同業組合
 祭政一致と臣民道 大倉精神文化研究所
 熾仁親王行實 高松宮家